Human Developmental Research
2017.Vol.31，1-14

親の肯定的・否定的養育行動と発達障害児の向社会的行動および内在化・外在化問題との関連

弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター　足　立　匡　基
弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター　高　柳　伸　哉
弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター　吉　田　恵　心
弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター　安　田　小　響
弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター　高　橋　芳　雄

Relationship between Parents' Positive and Negative Parenting Behaviors and Internalizing or Externalizing Problems, Prosocial Behavior of Children with Developmental Disorders

Research Center for Child Mental Development, Graduate School of Medicine, Hirosaki University, ADACHI, Masaki
Research Center for Child Mental Development, Graduate School of Medicine, Hirosaki University, TAKAYANAGI, Nobuya
Research Center for Child Mental Development, Graduate School of Medicine, Hirosaki University, YOSHIDA, Satomi
Research Center for Child Mental Development, Graduate School of Medicine, Hirosaki University, YASUDA, Sayura
Research Center for Child Mental Development, Graduate School of Medicine, Hirosaki University, TAKAHASHI, Michio

要　約

本研究は，5 歳児発達健診において発達の偏りが観察された児の保護者および所属園の担当教諭に対して質問紙調査を行い，養育行動と児の発達特性および内在化・外在化問題，向社会性との関連について横断的検証を行った。「要観察」および「要支援」となった幼児 120 名と TD 児 29 名を対象に分析を行った結果，要観察・要支援群では，TD 群と比較し肯定的養育行動の下位因子である「関与・見守り」の得点が有意に低く，否定的養育行動の下位因子である「厳しい叱責・体罰」の得点が有意に高い結果が示された。また，相関・重回帰分析の結果から，「関与・見守り」は内在化・外在化問題を抑制する可能性が示された。同様に「厳しい叱責・体罰」は内在化・外在化問題を促進する効果が示された。一方，ASD・ADHD・DCD の診断群ごとの重回帰分析からは，「厳しい叱責・体罰」因子が向社会性を促進する効果が示され，長期的予後を検証する必要性を指摘した。

【キー・ワード】発達障害，養育行動，向社会的行動，内在化・外在化問題

Abstract

This is a cross-sectional study which examined relationship between positive and negative parenting behaviors and internalizing problems, externalizing problems and prosocial behaviors among children who were diagnosed as a developmental disorder in a five-year-old checkup. Each factor was evaluated using questionnaires rated by parents and teachers in nursery schools. We compared children who needed follow-up or special supports for their developmental disorders (DD, n= 120) with typically developed children (TD, n=29). The result revealed that the DD group showed significantly lower score in factors of involvement and observation, which were involved in positive parenting, and significantly higher score in factors of stern rebukes and physical punishment, which were involved in negative parenting, than TD group. In addition, correlation and multiple regression analysis suggested that the parents' attitude of involvement and observation could be effective to suppress children's internalized and externalized problems while stern rebukes and physical punishments might promote those problems. On the other hand, multiple regression analyzing each developmental disorder such as ASD, ADHD and DCD showed that stern rebukes and physical punishments might promote children's prosocial behavior. Further longitudinal study is needed.to investigate if those relationships continue in the long term.
【Key words】　developmental disorders, parenting behavior, prosocial behavior, internalizing problems, externalizing problems

問題と目的

親の養育行動(parenting behaviors)は子どもの適応や発達に影響を与える中心的な要因として，これまでに多くの研究が行われてきた。これまでに，暖かさ(warmth)や指導的養育(authoritative control)といった肯定的養育(positive parenting)スタイルは，定型発達(Typically Developing: TD)児における社会性や学業成績の向上，情緒的安定との結びつきが示されている(Baumrind,1991; Domitrovich & Bierman, 2001; Kordi & Baharudin, 2010; Steinberg, Lamborn, Dornbusch, & Darling, 1992)。一方，冷淡さ(low warmth)，権威主義的養育(authoritarian control)といった否定的養育(negative parenting)スタイルは，低い社会性や学業成績，問題行動との関連が指摘されている(Baumrind, Larzelere, & Owens, 2010; Leung, Lau, & Lam, 1998)。

近年では，養育行動と発達特性との関連が指摘されており，自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder; ASD)や注意欠如多動症(Attention Deficit Hyperactivity Disorder；ADHD)などの発達障害児を持つ親が子どもの問題行動への対応に苦慮した結果，厳しいしつけや放任などの不適切な養育行動を取り，それが子どもの問題行動の持続・悪化や新たな問題行動の生起に繋がるという悪循環のプロセスの存在が示唆されている(Falk & Lee, 2012)。また，ADHD の文脈では，ADHD 児の挑戦的行動が親の否定的養育行動を引き出す可能性が示唆されており(Burke, Pardini, & Loeber, 2008;

Johnston, Murray, Hinshaw, Pelham, & Hoza, 2002; Lifford, Harold, & Thapar, 2008)，挑戦的行動と否定的養育の悪循環により，ADHD が反抗挑戦性障害(oppositional defiant disorder:ODD)や素行障害(conduct disorder:CD)と重複をするリスクが懸念されている。

このように発達障害児の適応と養育行動との関連が指摘される中，わが国では，標準化された尺度を用いて養育行動と子どもの発達障害特性や二次障害への影響について実態調査を行い，関連を見出すような実証研究は未着手の研究領域である。また，発達性協調運動障害(Developmental Coordination Disorder: DCD)については，養育行動との関連を定量的に扱った研究は，国際的にもほとんど行われていない。そこで本研究は，A 市における 5 歳児発達健診において，要支援および要観察となった幼児の保護者に対して質問紙調査を行い，親の養育行動と幼児の発達特性および向社会的行動，内在化・外在化問題との関連について横断的に検証を行い，発達障害における二次障害の予防に寄与する知見を提供することを目的として調査を行った。

本課題の検証仮説は以下の通りである。(i) 肯定的な養育行動は，発達障害児・および発達障害傾向を持つ幼児の向社会的行動を促進し，内在化・外在化問題を抑制する。(ii) 否定的な養育行動は，発達障害児・および発達障害傾向を持つ幼児の向社会的行動を抑制し，内在化・外在化問題を促進する。また，探索的に検討する課題を以下の通り設定する。(iii) 肯定的養育行動の 3 下位因子(関与・肯定的応答性・意思の尊重)および否定的養育行動の 3 下位因子(過干渉・非一貫性・厳しい叱責，体罰)それぞれの向社会的行動および内在化・外在化問題に対する説明力の検討。(iv) 発達障害区分(ASD, ADHD, DCD)による養育行動の差違と向社会的行動および内在化･外在化問題に及ぼす影響。

方　法

1.　対象

2015 年度中に A 市 5 歳児発達健診における 1 次スクリーニングの結果，発達の偏りが見られた児童とその保護者, および同健診における医師の診断面接（DSM-5（American Psychiatric Association, 2013）に準拠）の結果，発達の偏り（主診断は，ASD，ADHD，DCD）がみられ，「要観察」および「要支援」となった幼児とその保護者 120 名と診断面接の結果，TD と判断された児 29 名を対象とした。参加者の属性を表 1 に示した。

2.　調査尺度

2-1. 肯定的・否定的養育行動尺度（Positve and Negative Parenting Scale:PNPS; 伊藤ら,2014）: 国際的に使用されている Alabama Parenting Questionanaire（APQ; Shelton,Frick & Wooton, 1996）, Parental Bonding Instrument（PBI; Parker, Tupling & Brown,1979）, Parenting Scale（PS; Arnold, O'Leasy, Wolff & Acker, 1993), Parent Behavior Inventory（PBeI; Lovejoy Weis　O'Hare & Rubin, 1999）といった養育行動尺度の因子項目を参考にして標準化された，養育行動の肯定的側面と否定的側面の双方を包括的に評価できる尺度である。尺度は 35 項目，2 次因子構造となっており，1 次因子として肯定的行動と否定的行動，2 次因子として肯定的行動の下位に「関与・見守り」

「肯定的応答」「意思の尊重」の3因子，否定的行動の下位に「過干渉」「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」の3因子が設定されている。肯定的養育行動は得点が高ければ，肯定的養育行動を多くとっていることを意味し，否定的養育行動は得点が高ければ否定的養育行動を多くとっていることを意味する。

2-2. 日本語版 Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) 親評定フォームおよび教師評定フォーム（Matsuishi, Nagano, Araki, Tanaka, Iwasaki et al., 2008）：児童の行動的・情緒的問題を把握する尺度として欧米諸国をはじめ国際的に研究，臨床，教育など幅広い用途に利用されている尺度であり，わが国においても標準化され，信頼性・妥当性が検証されている(野田ら, 2014)。尺度は，「情緒的問題」「問題行動」「多動・不注意」,「仲間関係問題」「向社会性」の5因子からなり，各5項目計25項目の質問から構成される。本研究では，親評定・教師評定における「情緒的問題」「仲間関係問題」「向社会性」の3因子を分析の対象とした。

2-3. Conners3 日本語版(田中・坂本, 2011): 青少年を対象にADHDおよびADHDと共存する可能性の高い関連問題の有無の評価に特化したスケールであり，信頼性・妥当性が確認されている。本研究では，「CD」「ODD」のDSM-Ⅳ-TRの症状スケールと「不安」と「抑うつ」に関するスクリーニング項目を分析対象とした。検査用紙は，「保護者用」「教師用」「本人用」の3種類あるが，本研究では，「保護者」評定を用いた。

2-4. 児童用自閉症スペクトラム指数(Autism-Spectrum Quotient:AQ, 若林・内山・東條・吉田・黒田他, 2007): ASDにあてはまるかどうかという概略的な診断に使用できるとともに，その障害の程度や，より精密な診断を行うべきかどうかといった臨床的スクリーニングに使用できることに加えて，自閉症スペクトラム仮説にもとづいて一般健常者の自閉症傾向の個人差を測定できる尺度（Baron-Cohen et al. 2001）である。「社会的スキル」（10項目),「注意の切り替え」（10項目),「細部への注意」（10項目),「コミュニケーション」（10項目),「想像力」（10項目）の5つの領域について，総計50項目の質問から構成され，得点が高いほど，ASD特性が高いことを意味する。

2-5. ADHD Rating Scale(ADHD-RS, Dupaul, Power, Anastopoulos & Reid, 1998)の日本語版(市川・田中, 2008): DSM –IVのADHD診断基準に準拠してDupaul et al.(1998)によって作成された行動評価尺度で，不注意尺度9項目，多動性-衝動性尺度9 項目から構成され，得点が高いほど各症状が強いことを意味する。

2-6. Developmental Coordination Disorder Questionnaire (DCDQ-J, Nakai, Miyachi, Okada, Tani, Nakajima et al., 2011): DCDQ は，5-15歳を対象とするDCDのスクリーニングツールであり，日常動作に関係する15項目を回答に対して回答を行う。具体的には，「動作における身体統制」(6項目),「微細運動」(4項目),「全般的協応性」(5項目)の3領域で評価され，得点が高いほど協調運動に問題がある可能性が低いことを意味する。

3. 調査手続き

郵送法にて上述の尺度を対象者に送付し，診断面接の実施時に回収を行った。

4. 解析方法

TD 群と要観察・要支援群における PNPS の項目得点平均値を算出した。続けて，TD 群と要観察・要支援群における PNPS の因子得点について共分散分析を用いて比較した。共分散分析においては，参加者の属性（表 1）において群間で有意差が見られた IQ，月齢，性別を共変量に投入した。発達特性と内在化・外在化問題および向社会性との関連を検討するため，相関分析を行った。続けて，要観察・要支援群において養育行動を独立変数，内在化・外在化問題，向社会性指標を従属変数とする重回帰分析を行った。最後に，要観察・要支援群を ASD 群，ADHD 群，DCD 群に分け各群ごとに養育行動を独立変数，内在化・外在化問題，向社会性指標を従属変数とする重回帰分析を行った。重回帰分析には，Mplus Version 7.3(Muthen & Muthen)を用い，欠損値は完全情報最尤法により補完したため，対象となる群の全参加者データを使用した。その他の分析には PASW Statistics 23 (SPSS) を使用し，分析ごとに欠損値のある対象者は除外した。

5. 倫理的配慮

5 歳児発達健診における 1 次スクリーニングについては，説明文書によって調査への回答は任意であり，回答しないことによる不利益は生じないことを教示するとともに，調査用紙への回答をもって同意が得られたものとした。2 次健診においては，改めて本研究の内容を含む 2 次健診の概要を個別に書面と口頭で説明し，得られたデータの研究使用について書面にて同意を得た。以上の本研究の手続きは，弘前大学大学院医学研究科倫理委員会の審査と承認を受けた。

表 1　参加者の属性

	TD(*n* =29)	要観察・ 要支援(*n* =120)	*p*
男児*n* (%)	8(27.6)	70(58.3)	.003
月齢 *M*	64.59	63.64	.070
同胞順位 *M*	1.48	2.21	.977
同胞数 *M*	2.21	1.89	.074
WISC-Ⅳ:FSIQ	99.19	91.14	<.001
ASD*n* (%)	—	31(25.8)	ー
ADHD*n* (%)	—	47(39.2)	ー
DCD*n* (%)	—	46(38.3)	ー
ID *n* (%)	—	7(5.8)	ー
母年齢:母子手帳受け取り時 *M*	30.70	29.61	.376
父年齢:母子手帳受け取り時 *M*	31.74	31.67	.956
ひとり親の家庭	2(6.9)	19(15.8)	.174
世帯年収			
200万円未満*n* (%)	1(3.4)	18(15.0)	
200-400万円未満*n* (%)	12(41.4)	42(35.0)	
400-700万円未満*n* (%)	12(41.4)	39(32.5)	.373
700-1000万円未満*n* (%)	2(6.9)	7(5.8)	
1000万円以上*n* (%)	1(3.4)	11(9.2)	
欠損*n* (%)	1(3.4)	11(9.2)	
インフォーマント:母親の割合*n* (%)	28(96.6)	114(94.0)	.277

Note. TD=Typical Development, WISC-Ⅳ= Wechsler Intelligence Scale for Children 4th Edition, ASD=autism spectrum disorder, ADHD=attention deficit/ hyperactivity disorder, DCD= developmental coordination disorder, ID= Intellectual Disabilities

結果と考察

1.　TD 群，要観察・要支援群における PNPS の各項目平均得点

TD 群，要観察・要支援群における PNPS の各項目平均得点を因子ごとに表 2 に示した。各項目得点の平均値では，全体的な傾向として，肯定的養育の下位項目においては，TD 群が高く，否定的養育の下位項目では，要観察・要支援群が高い傾向が示された。

2.　肯定的否定的養育行動の群間比較

TD 群と要観察・要支援群における PNPS 下位因子平均得点の差について，養育行動以外の影響因を統制するため群間で有意差が見られた WISC-Ⅳの FSIQ，月齢，性別を共変量とする共分散分析を行った。結果を表 3 に示した。

「肯定的養育 Total Score」について，TD 群の得点が有意に高いという結果が示された($F(1,139)=4.01$, $p=.047$, $\eta_p^2=.029$)。下位因子のうち「関与・見守り」について TD 群の得点が有意に高い結果が示された($F(1,139)=4.07$, $p=.022$, $\eta_p^2=.030$)。「肯定的応答」因子($F(1,139)=.88$, $p=.359$, $\eta_p^2=.007$)および「意志の尊重」因子($F(1,139)=.69$, $p=.406$, $\eta_p^2=.005$)の得点には，有意な差が見られなかった。

表 2　TD 群，要観察・要支援群における PNPS 項目得点平均

Factor 1次	2次		TD (n=29) *M*	*SD*	要観察・要支援 (n=120) *M*	*SD*
肯定的養育	関与・見守り	6 園の行事に積極的に参加する	3.72	.45	3.47	.77
		10 園での出来事や友達のことについて話す	3.28	.88	3.08	.84
		19 子どもが遊ぶ友達のことをよく知っている	3.21	.77	2.67	.93
		20 子どもに，明日は何をする予定か尋ねる	2.69	1.00	2.54	.92
		24 子どもが出かけるときは，行き先や帰る時間を聞く	2.45	1.27	2.14	1.19
		29 子どもが放課後，何をしているのか把握している	3.10	1.05	3.00	.96
		30 子どもと一緒に遊んだり，楽しいことをする	3.17	.71	3.02	.76
		33 子どもに行き先を告げずに，外に出かける	1.14	.35	1.13	.36
		34 休日には子どもをレジャー（遊園地，動物園，旅行など）に連れていく	3.10	.86	2.77	.86
	肯定的応答	11 子どもが何かをしてくれたときに，ありがとうと言う	3.76	.44	3.66	.51
		13 頭をなでる，抱き合う等のスキンシップをする	3.62	.56	3.72	.52
		18 子どもが何かうまくできたときには，ほめてあげる	3.83	.47	3.66	.54
		27 子どもが喜んでいるときには，一緒になって喜ぶ	3.38	.73	3.37	.68
		35 おもしろいことを子どもと一緒に笑う	3.69	.47	3.57	.58
	意志の尊重	1 子どもの好きなように遊ばせている	3.21	.62	3.19	.60
		2 子どもが問題に直面していても，できるだけ本人に解決させる	2.34	.61	2.41	.73
		7 できるだけ子ども自身の意思を尊重する	3.10	.56	2.99	.62
		15 失敗することがわかっていても，子どものやりたいようにやらせる	2.79	.82	2.57	.81
		25 子どもの好きな服を着せている	2.83	.80	2.63	.90
		26 自分の都合よりも，子どもの考えを優先する	2.48	.63	2.52	.69
否定的養育	過干渉	14 テストの成績が少しでも悪くなれば（または良くならなければ）子どもに説教する	1.31	.47	1.35	.62
		16 子どもの意思とは関係なく，習い事や塾に行かせている	1.14	.44	1.14	.41
		23 自分がいないと，子どもは何もできないと感じる	1.69	.85	1.63	.68
		28 どの友達と遊ぶべき（遊ぶべきでない）かを，子どもに言い聞かせている	1.00	.00	1.13	.48
		31 自分の目を離れている間，子どものことが心配で仕方ない	1.90	.72	1.97	.90
	非一貫性	3 子どもを叱ったりほめたりする基準が，その時の気分で左右される	2.03	.68	2.13	.73
		12 個人的なイライラを子どもにぶつけてしまうときがある	1.72	.59	1.79	.69
		17 子どもへの叱り方が，自分の気分によって変わる	1.83	.66	1.94	.70
		32 子どものペースより，自分のペースを優先する	2.07	.59	1.98	.61
	厳しい叱責・体罰	4 ちょっとしたことでも口やかましくなる	2.45	.74	2.36	.84
		5 子どもが言うことを聞かないとき，頭に血が昇り，冷静さを失う	1.86	.58	2.02	.80
		8 子どもに対して，乱暴な言葉遣いになる	1.83	.54	2.08	.79
		9 子どもが悪いことをしたときには，大声で怒鳴る	2.17	.54	2.40	.78
		21 子どもに対して，長時間説教をしたり，文句を言い続ける	1.24	.44	1.40	.60
		22 しつけとして，子どもの頭や体を叩くことがある	1.59	.57	1.79	.64

「否定的養育 Total Score」には，群間で有意な差が見られなかった(F(1,139)=2.77, p=.099, η_p^2=.020)が，下位因子のうち，「厳しい叱責・体罰」因子において要観察・要支援群の得点が有意に高いという結果が示された(F(1,139)=4.04, p=.047, η_p^2=.029)。「過干渉」因子(F(1,139)=.53, p=.467, η_p^2=.004)および「非一貫性」因子(F(1,139)=.86, p=.355, η_p^2=.006)には，群間で有意な差は見られなかった。

以上から，要観察・要支援群では，TD 群と比較し，肯定的養育行動がとられづらく，逆に否定的養育行動のうち「厳しい叱責・体罰」が多くとられる可能性が示唆された。肯定的養育行動の下位因子の中では,「関与・見守り」因子の得点が有意に低く,「子どもが遊ぶ友達のことをよく知っている」や「休日には子どもをレジャーに連れていく」といった下位項目の特徴から，この背景には発達特性に起因する友人関係の問題や親の負担の多さなどが推測される。

表 3　PNPS 下位因子平均値の群間比較

	TD(n=29)		要観察・要支援(n=120)				
	M	SE	M	SE	F	p	η_p^2
関与・見守り	25.71	.74	23.88	.38	4.07	.022	.030
肯定的応答	18.36	.37	17.96	.19	.88	.350	.007
意思尊重	16.75	.50	16.28	.25	.69	.406	.005
肯定的養育 Total Score	60.98	1.27	58.10	.65	4.01	.047	.029
過干渉	6.90	.29	7.15	.15	.53	.467	.004
非一貫性	7.48	.41	7.92	.20	.86	.355	.006
厳しい叱責・体罰	10.81	.62	12.22	.31	4.04	.047	.029
否定的養育 Total Score	25.63	1.06	27.15	.54	2.77	.099	.020

Note.PNPS: Positve and Negative Parenting Scale:PNPS
WISC-ⅣのFSIQ、月齢、性別を共変量として投入した。

3. 発達特性と内在化・外在化問題，向社会性との相関分析

各発達特性と内在化・外在化問題，向社会性との関連を検討するため，全参加者を対象として，相関分析を行った。ASD 特性には，AQ の得点，ADHD 特性には ADHD-RS の得点，DCD 特性には DCDQ の得点をそれぞれ用いた。また内在化問題の指標として，保護者および教師評定の SDQ「情緒的問題」因子，Conners3「不安」因子および「抑うつ」因子を用いた。外在化問題の指標として，保護者および教師評定の SDQ「仲間関係問題」因子，Conners3「CD」因子および「ODD」因子を用いた。向社会性の指標には，保護者および教師評定の SDQ「向社会性」因子を用いた。結果を表 4 に示した。

まず発達特性との関連から自閉症特性(AQ)が強くなるほど，肯定的養育行動がとられづらく，否定的養育行動が多くなる傾向が示された。ADHD 特性(ADHD-RS)においては，肯定的養育との関連は示されなかったが，特性が強いほど否定的養育行動が多くとられる傾向が示された。DCD 特性(DCDQ)においては，否定的養育との関連は示されず，協調運動に問題が少ない(得点が高い)ほど，肯定的養育行動のうち,「関与・見守り」行動が多くとられる傾向が示された。

養育行動と内在化問題との関連では，肯定的養育行動との関連が示されなかった一方，否定的養育行動が多いほど,「不安」や「抑うつ」が高い傾向が示された。養育行動と外在化問題との関連では，肯定的養育行動が多いほど,「仲間関係問題」(親評定)が少なくなる傾向が示された。同時に否定的養育行動が多いほど,「CD」「ODD」の診断基準と合致する行動が多くとられている傾向が示唆された。社会性の相関分析一方で，教師評定においては，否定的養育行動が多いほど，「仲間関係問題」が少なくなっている可能性が示唆された。養育行動と向社会性との関連では，親評定では，肯定的養育行動が多いほど，向社会性が高い傾向が示された。一方，教師評定では，否定的養育行動が多いほど，向社会性が低い傾向が示された。

表 4　発達特性と内在化・外在化問題，向社会性の相関分析

(*n* =149)	肯定的養育行動				否定的養育行動			
	関与 見守り	肯定的 応答	意思尊重	Total Score	過干渉	非一貫性	厳しい叱責 ・体罰	Total Score
発達特性								
AQTotal	-.309**	-.162*	-.177*	-.291**	.296**	.092	.173*	.216**
ADHD-RS	-.110	-.061	-.054	-.101	.286**	.247**	.238**	.306**
DCDQ	.315**	.014	.102	.225**	-.029	.050	.101	.067
保護者評定								
P-SDQ情緒	-.137	-.030	-.011	-.092	.039	-.043	.072	.036
P-SDQ仲間	-.406**	-.208**	-.135	-.344**	.178*	.012	.042	.079
P-SDQ向社会性	.300**	.190*	.194*	.300**	-.032	-.030	-.076	-.063
Conners 3 : CD	-.155	-.053	-.012	-.109	.449**	.247**	.435**	.464**
Conners 3 : ODD	-.150	-.096	-.176*	-.180*	.272**	.219**	.429**	.399**
Conners 3 : 不安	-.110	-.069	-.009	-.087	.242**	.224**	.259**	.297**
Conners 3 : 抑うつ	-.082	-.105	.015	-.071	.202*	.146	.318**	.290**
教師評定								
T-SDQ情緒	-.052	-.037	.001	-.040	-.086	-.018	-.043	-.055
T-SDQ仲間関係	-.001	.123	.101	.072	.013	-.268**	-.207*	-.210*
T-SDQ向社会性	-.001	-.146	-.069	-.066	-.072	-.226**	-.240**	-.207**

Note. AQ = Autism Spectrum Quotient, ADHD-RS= ADHD-Rating Scale, DCDQ=Developmental Coordination Disorder Questionnaire, SDQ=Strengths and Difficulties Questionnaire, CD=Conduct Disorder, ODD=Oppositional Defiant Disorder
*p < .05, **p <. 01

4.　要観察・要支援群および各発達障害群における養育行動と内在化・外在化問題，向社会性との関連

内在化・外在化問題，向社会性に対する PNPS の下位因子の影響力を精査するため，重回帰分析を行った。分析にあたり，WISC-Ⅳの FSIQ，月齢，性別を統制変数として投入した。

結果として障害区分を考慮せず要観察・要支援群内で行った重回帰分析では，肯定的養育のうち,「関与・見守り」が内在化・外在化問題を抑制する可能性が示された。また,「過干渉」「厳しい叱責・体罰」因子は，内在化・外在化問題を促進する可能性が示唆された。ASD・ADHD・DCD の障害区分ごとに分析をした結果からは，ADHD でもっとも多くの領域で養育行動の有意な影響が示され，ASD でもっとも少なかった。

養育行動の影響ついては，障害区分を考慮せず行った分析と概ね同じ方向性が示され，特に否定的養育行動のうち「厳しい叱責・体罰」は一貫して，内在化・外在化問題を促進する効果が示された。その一方，ASD 群において否定的養育行動の「厳しい叱責・体罰」因子が「向社会性」(教師評定)を促進すること，ADHD 群において肯定的養育行動の「意志の尊重」因子が「情緒的問題」(保護者評定)を促進することや否定的養育行動の「厳しい叱責・体罰」因子が「向社会性」(教師評定)を促進すること，DCD 群において肯定的養育行動の「意志の尊重」が「向社会性」(保護者評定)を抑制し，

表 5　要観察・要支援群における養育行動と内在化・外在化問題，向社会性との関連

独立変数	肯定的養育行動									否定的養育行動									R^2
	関与見守り			肯定的応答			意思尊重			過干渉			非一貫性			厳しい叱責・体罰			
目的変数	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	
保護者評定																			
SDQ情緒	**-.286**	**-.287－-.033**	**.014**	.097	-.167－.380	.442	.089	-.115－.263	.438	-.055	-.389－.237	.630	-.152	-.413－.112	.257	.198	-.051－.307	.158	.097
SDQ仲間	**-.377**	**-.261－-.073**	**.001**	.097	-.287－.119	.415	.076	-.090－.190	.478	-.132	-.030－.434	.087	-.132	-.298－.092	.296	-.079	-.173－.092	.175	.202
SDQ向社会性	.166	-.029－.188	.150	.016	-.220－.250	.900	.079	-.105－.218	.492	.197	-.035－.502	.087	.118	-.125－.326	.378	-.123	-.222－.085	.379	.095
Conners 3 : CD指標	**-.231**	**-.345－-.021**	**.027**	.191	-.055-.646	.098	.143	-.073-.410	.170	**.218**	**.026－.827**	**.037**	.013	-.318－.354	.916	**.374**	**.115－.573**	**.004**	.261
Conners 3 : ODD指標	-.180	-.483-.035	.089	.222	-.020-1.098	.058	-.082	-.537-.233	.435	-.015	-.685－.592	.886	-.030	-.601－.470	.809	**.500**	**.358－1.089**	**<.001**	.241
Conners 3 : 不安指標	-.174	-.138-.016	.122	.085	-.109-.224	.493	.118	-.053-.176	.293	.118	-.089－.291	.295	.158	-.062－.257	.227	.112	-.064－.154	.412	.134
Conners 3 : 抑うつ指標	-.019	-.043-.036	.860	-.117	-.127-.043	.326	.135	-.021-.095	.208	-.098	-.141－.052	.360	-.010	-.084－.078	.938	**.411**	**.033－.143**	**.002**	.206
教師評定																			
SDQ情緒	.060	-.084-.141	.617	-.102	-.341-.155	.458	.040	-.137-.192	.741	-.088	-.371－.170	.462	-.034	-.257－.202	.812	-.084	-.199－.103	.564	.045
SDQ仲間	-.030	-.159-.123	.794	-.023	-.339-.283	.858	.066	-.146-.266	.564	.115	-.165－.513	.311	**-.286**	**-.597－-.023**	**.035**	-.079	-.249－.137	.567	.148
SDQ向社会性	-.104	-.244-.087	.347	-.006	-.357-.374	.963	.009	-.233-.252	.938	-.139	-.654－.144	.207	.232	-.031－.645	.075	.122	-.083－.372	.202	.201

Note. CI=Confidence Interval, SDQ=Strengths and Difficulties Questionnaire, CD=Conduct Disorder, ODD=Oppositional Defiant Disorder

表 6　ASD 群における養育行動と内在化・外在化問題，向社会性との関連

独立変数	肯定的養育行動									否定的養育行動									R^2
	関与見守り			肯定的応答			意思尊重			過干渉			非一貫性			厳しい叱責・体罰			
目的変数	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	
保護者評定																			
SDQ情緒	-.208	-.525－.151	.128	.343	-.168－.762	.089	.123	-.291－.502	.278	-.086	-.485－.334	.345	-.119	-.636－.415	.335	.315	-.209－.753	.115	.444
SDQ仲間	**-.444**	**-.723－.057**	**.013**	-.122	-.584－.363	.310	-.079	-.474-.326	.351	.112	-.316－.513	.305	-.009	-.549－.519	.490	-.301	-.745－.231	.124	.428
SDQ向社会性	.044	-.316－.382	.404	-.029	-.505－.450	.455	.166	-.260－.547	.219	.257	-.194－.639	.126	.120	-.434－.636	.341	.096	-.403－.573	.356	.423
Conners 3 : CD指標	-.023	-.368－.320	.447	.359	-.149－.775	.079	-.005	-.403－.390	.489	.364	-.008－.724	.054	.115	-.433－.618	.345	.250	-.267－.703	.167	.446
Conners 3 : ODD指標	-.023	-.345－.296	.444	.369	-.108－.761	.060	-.069	-.435－.035	.357	.271	-.144－.622	.094	-.128	-.615－.371	.304	**.502**	**-.008－.886**	**.026**	.525
Conners 3 : 不安指標	-.060	-.398－.287	.366	-.044	-.508－.423	.431	.156	-.259－.532	.229	**.387**	**-.067－.742**	**.047**	-.388	-.862－.174	.082	.227	-.286－.680	.190	.444
Conners 3 : 抑うつ指標	.166	-.166－.453	.154	-.021	-.445－.399	.462	.231	-.150－.563	.112	.099	-.282－.458	.302	-.410	-.836－.095	.053	**.785**	**.284－1.107**	**.002**	.565
教師評定																			
SDQ情緒	.140	-.270－.500	.251	-.022	-.550－.501	.469	.194	-.281－.609	.212	-.038	-.497－.431	.439	-.091	-.682－.510	.392	.055	-.490－.590	.392	.308
SDQ仲間	-.312	-.627－.082	.060	-.176	-.627－.082	.249	.087	-.346－.487	.344	-.242	-.646－.225	.152	-.206	-.750－.375	.240	.009	-.495－.518	.487	.402
SDQ向社会性	.157	-.232－.495	.212	.087	-.427－.570	.375	.206	-.244－.595	.180	.190	-.274－.598	.208	-.242	-.776－.347	.204	**.548**	**-.039－.973**	**.033**	.394

Note. ASD=Autism Spectrum Disorder CI=Confidence Interval, SDQ=Strengths and Difficulties Questionnaire, CD=Conduct Disorder, ODD=Oppositional Defiant Disorder

「ODD」を促進すること，否定的養育行動の「過干渉」「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」因子が「情緒的問題」(教師評定)・「仲間関係問題」(教師評定)を抑制し，「向社会性」(教師評定)を促進するなど一部で仮説を支持しない結果が示された。

表 7　ADHD 群における養育行動と内在化・外在化問題，向社会性との関連

独立変数	肯定的養育行動									否定的養育行動									R^2
	関与見守り			肯定的応答			意思尊重			過干渉			非一貫性			厳しい叱責・体罰			
目的変数	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	
保護者評定																			
SDQ情緒	**-.330**	**-.555－-.055**	**.009**	**.395**	**.049－.678**	**.013**	-.113	-.390－.179	.223	.136	-.157－.409	.179	-.207	-.550－.170	.141	.062	-.327－.447	.382	.407
SDQ仲間	**-.479**	**-.674－-.213**	***p* <. 001**	.115	-.212－.424	.115	**-.250**	**-.504－.042**	**.046**	**.286**	**-.006－.537**	**.028**	.036	-.320－.390	.422	**-.362**	**-.703－.037**	**.038**	.434
SDQ向社会性	.234	-.051－.480	.051	.061	-.280－.390	.362	.185	-.123－.460	.115	.194	-.115－.469	.107	.259	-.131－.609	.096	-.079	-.471－.330	.352	.360
Conners 3 ：CD指標	-.203	-.450－.074	.074	.069	-.266－.394	.343	.120	-.180－.397	.212	.202	-.101－.475	.094	-.024	-.389-.349	.450	**.321**	**-.064－.687**	**.049**	.382
Conners 3 ：ODD指標	-.208	-.457－.072	.072	.115	-.229－.440	.254	-.009	-.304－.285	.477	.037	-.261－.329	.405	-.225	-.576－.167	.129	**.387**	**-.036－.746**	**.037**	.362
Conners 3 ：不安指標	-.058	-.332－.224	.345	-.205	-.530－.155	.132	.280	-.042－.550	.043	.063	-.246－.362	.346	-.073	-.451－.322	.360	.255	-.176－.645	.121	.314
Conners 3 ：抑うつ指標	-.008	-.269－.251	.475	-.071	-.389－.256	.341	.216	-.081－.478	.073	-.227	-.490－.070	.064	-.127	-.473－.246	.250	**.468**	**.059－.805**	**.012**	.413
教師評定																			
SDQ情緒	.040	-.259－.329	.397	-.088	-.444－.282	.328	-.043	-.357－.283	.403	-.042	-.358－.282	.401	-.056	-.457－.361	.398	.099	-.342－.524	.334	.272
SDQ仲間	-.153	-.434－.155	.167	-.066	-.430－.307	.371	.060	-.271－.377	.364	.024	-.304－.347	.443	-.205	-.595－.229	.178	-.042	-.476-.407	.426	.249
SDQ向社会性	.014	-.274－.296	.461	.001	-.353－.351	.499	.083	-.234－.384	.304	**-.262**	**-.543－.067**	**.049**	-.015	-.408－.384	.472	**.495**	**.045－.853**	**.015**	.323

Note. ADHD= Attention Deficit Hyperactivity Disorder, CI=Confidence Interval, SDQ=Strengths and Difficulties Questionnaire, CD=Conduct Disorder, ODD=Oppositional Defiant Disorder

表 8　DCD 群における養育行動と内在化・外在化問題，向社会性との関連

独立変数	肯定的養育									否定的養育									R^2
	関与見守り			肯定的応答			意思尊重			過干渉			非一貫性			厳しい叱責・体罰			
目的変数	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	*β*	*95%CI*	*p*	
保護者評定																			
SDQ情緒	-.055	-.371－.267	.371	.248	-.185－.633	.128	.263	-.092－.568	.072	-.013	-.321－.297	.468	.148	-.205－.475	.205	.140	-.221－.482	.224	.343
SDQ仲間	-.193	-.504－.150	.133	-.042	-.468－.385	.427	.032	-.319－.374	.430	.091	-.240－.401	.295	-.030	-.382－.328	.433	.070	-.299－.431	.357	.291
SDQ向社会性	-.101	-.422－.232	.276	.374	-.080－.752	.051	**-.341**	**-.645－.025**	**.033**	.147	-.187－.447	.191	.025	-.329－.375	.444	.171	-.202－.518	.184	.302
Conners 3 ：CD指標	-.111	-.379－.167	.216	.256	-.114－.590	.084	-.050	-.335－.240	.366	-.024	-.289－.242	.432	.023	-.273－.315	.439	.023	-.273－.315	.439	.532
Conners 3 ：ODD指標	-.063	-.368－.247	.349	.386	-.040－.744	.036	**-.385**	**-.664－-.042**	**.014**	-.106	-.396－.201	.248	.054	-.281－.381	.374	**.443**	**.081－.733**	**.009**	.390
Conners 3 ：不安指標	-.111	-.435－.229	.263	-.210	-.618－.234	.179	**.336**	**-.039－.642**	**.038**	.016	-.310－.337	.460	-.027	-.382－.333	.440	-.012	-.376－.357	.474	.281
Conners 3 ：抑うつ指標	-.103	-.436－.245	.282	-.098	-.532－.350	.337	.013	-.346－.369	.472	.080	-.260－.401	.321	-.028	-.390－.342	.439	-.041	-.409－.344	.418	.240
教師評定																			
SDQ情緒	.249	-.091－.539	.072	-.274	-.662－.156	.107	.012	-.325－.342	.474	**-.289**	**-.564－.037**	**.042**	-.114	-.445－.240	.260	-.016	-.364－.342	.465	.367
SDQ仲間	-.135	-.444－.193	.210	-.135	-.444－.193	.268	.063	-.278－.392	.360	.107	-.212－.404	.253	**-.354**	**-.656－.014**	**.029**	-.168	-.501－.199	.179	.367
SDQ向社会性	.167	-.181－.479	.171	.002	-.432－.427	.497	-.049	-.391－.299	.392	-.172	-.472－.160	.153	.095	-.269－.439	.303	**.410**	**.022－.722**	**.020**	.315

Note. DCD= Developmental Coordination Disorder, CI=Confidence Interval, SDQ=Strengths and Difficulties Questionnaire, CD=Conduct Disorder, ODD=Oppositional Defiant Disorder

総合考察

研究仮説(i)「肯定的な養育行動は，発達障害児・および発達障害傾向を持つ幼児の向社会的行動を促進し，内在化・外在化問題を抑制する」

および研究仮説(ii)「否定的な養育行動は，発達障害児・および発達障害傾向を持つ幼児の向社会的行動を抑制し，内在化・外在化問題を促進する」については，相関分析および重回帰分析から概ね支持される結果が示された。これまでに，肯定的養育スタイルは，TD 児における社会性や学業成績の向上，情緒的安定との結びつきが示され(Baumrind,1991; Domitrovich & Bierman, 2001; Kordi & Baharudin, 2010; Steinberg et al., 1992)，否定的養育スタイルは，低い社会性や学業成績，問題行動との関連が指摘されている(Baumrind et al., 2010; Leung et al., 1998)。本研究の結果から，発達障害児および発達障害傾向を持つ幼児においてもこれらの先行研究を支持する結果が示されたといえる。

続けて行った探索的研究課題(iii)「肯定的養育行動の 3 下位因子(関与・肯定的応答性・意思の尊重)および否定的養育行動の 3 下位因子(過干渉・非一貫性・厳しい叱責，体罰)それぞれの向社会的行動および内在化・外在化問題に対する説明力の検討」では，肯定的養育行動のうち，とりわけ「関与・見守り」と外在化問題の関連が強いこと，否定的養育行動では「過干渉」と「不安」および「厳しい叱責・体罰」と内在化・外在化問題との関連が強いことが明らかとなった。

一方で，探索的研究課題(iv)「発達障害区分(ASD，ADHD，DCD)による養育行動の差違と向社会的行動および内在化・外在化問題に及ぼす影響」からは，ADHD 群において養育行動が内在化・外在化問題，向社会性を有意に説明する領域が最も広い結果となった。先行研究からは，ADHD 児の挑戦的行動が親の否定的養育行動を引き出す可能性が示唆されているが(Burke et al., 2008; Johnston et al., 2002; Lifford et al., 2008)，本研究からも，挑戦的行動と否定的養育，とりわけ「厳しい叱責・体罰」の悪循環により，ADHD が ODD や CD と重複をするリスクが示された。

また，この発達障害区分による分析の一部では，仮説(i)および(ii)を支持しない結果が示された。なかでも ASD 群，ADHD 群，DCD 群すべての群において，否定的養育行動のうち「厳しい叱責・体罰」が「向社会性」(教師評定)を促進する結果が示されたが，「厳しい叱責・体罰」は，この他の点において，一貫して内在化・外在化問題との関連が示唆された項目であり，長期的な予後を含めたさらなる検証が必要である。向社会性の向上は，「親の厳しい叱責・体罰」の強化子となり，即効性のある養育行動であると親に学習された場合，内在化・外在化問題への悪循環を形成する可能性が懸念される。また，この点は，診断のない要観察群を含めた分析では，見られなかった特徴であり，発達障害特性による影響が大きいものと推測される。発達障害によって生じる問題行動が親の養育行動のあり方に影響を及ぼすかについての知見は錯綜をしており(Hipwell, Keean, Kasza, Loeber, Stouthamer-Lober et al., 2008)，こうした相互的影響関係は，今後，縦断的手法によって明らかにしていく必要がある。

引用文献

American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 5th ed. Washington, DC: American Psychiatric Association; 2013.

Arnold, D.S., O'Leasy, S.G., Wolff, L.S., & Acker, M.M. (1993). The Parenting Scale: A measure of dysfunctional parenting in discipline situations. *Psychological Assessment*, 5, 137-144.

Baron-Cohen S, Wheelwright S, Skinner R, Martin J, Clubley E (2001): The autism-spectrum quotient (AQ): evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Autism and Developmental Disorders*. 31, 5–17.

Baumrind, D. (1991). The influence of parenting style on adolescent competence and substance use. *Journal of Early Adolescence*, 11, 56-95.

Baumrind, D., Larzelere, R. E., & Owens, E. B. (2010). Effects of preschool parents' power assertive patterns and practices on adolescent development. *Parenting: Science and Practice*, 10, 157-201.

Burke, J. D., Pardini, D. A., & Loeber, R. (2008). Reciprocal relationships between parenting behavior and disruptive psycho pathology from childhood through adolescence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 36, 679-92.

Domitrovich, C. E., & Bierman, K. L. (2001). Parenting practices and child social adjustment: Multiple pathways of influence. Merrill-Palmer Quarterly, 47, 235-263.

DuPaul, G. J., Power, T. J., Anastopoulos, A. D., & Reid,R. (1998). ADHD rating scale–IV: Checklists, norms, and clinical interpretation. New York, The Guilford Press.（デュポール,G. J., パワー, T. J.,アナストポウロス,A. D.,リード,R. 市川宏伸・田中康雄（監）坂本　律（訳）(2008). 診断・対応のための ADHD 評価スケール ADHD–RS（DSM 準拠）チェックリスト，標準値とその臨床的解釈．明石書店）

Falk, A.E., & Lee, S.S. (2012). Parenting behavior and conduct problems in children with and without attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD): Moderation by callous-unemotional traits. *Journal of psychopathology and Behavioral Assessment*, 34, 174-181.

Hipwell A, Keenan K, Kasza K, Loeber R, Stouthamer-Loeber M, Bean T. (2008). Reciprocal influences between girls' conduct problems and depression, and parental punishment and warmth: a six year prospective analysis. *Journal of abnormal child psychology*. 36, 663-77.

伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次 (2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発: 因子構造および構成概念妥当性の検証．発達心理学研究, 25, 221-31.

Johnston, C., Murray, C., Hinshaw, S. P., Pelham, W. E., Jr., & Hoza, B. (2002). Responsiveness in interactions of mothers and sons with ADHD: Relations to maternal and child characteristics. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 30, 77-88.

Keith Conners 著，田中康雄監訳，坂本律訳（2011）. Conners 3TM 日本語マニュアル.金子書房，東京.

Kordi, A., & Baharudin, R. (2010). Parenting attitude and style and its effect on children's school achievements. *International Journal of Psychological Studies*, 2, 217-22.

Leung, K., Lau, S., & Lam, W. L. (1998). Parenting styles and academic achievement: A cross-cultural study. *Merrill Palmer Quarterly*, 44, 157-72.

Lifford, K. J., Harold, G. T., & Thapar, A. (2008). Parent-child relationships and ADHD symptoms: A longitudinal analysis. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 36, 285-96.

Lovejoy, M.C., Weis, R., O'Hare, E., & Rubin, E. C. (1999). Development and initial validation of the parent behavior inventory. *Psychological Assessment*, 11, 534-45.

Matsuishi, T., Nagano, M., Araki, Y., Tanaka, Y., Iwasaki, M., Yamashita, Y., Nagamitsu, S., Iizuka, C., Ohya, T., Shibuya, K., Hara, M., Matsuda, K., Tsuda, A., Kakuma, T. (2008): Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples. *Brain and Development*, 30, 410-15.

Nakai, A., Miyachi, T., Okada, R. Tani, I, Nakajima, S. Onishi, M., Fujita, C., Tsujii, M (2011) Evaluation of the Japanese version of the Developmental Coordination Disorder Questionnaire as a screening tool for clumsiness of Japanese children. *Research in Developmental Disabilities*, 32, 1615-22.

Parker, G., Tupling, H., & Brown, L.B. (1979). Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10.

Shelton, K.K., Frick, P.J., & Wootton, J. (1996). Assessment of parenting practices in families of elementary school-age children. *Journal of Clinical Child Psychology*, 25, 317-29.

Steinberg, L., Lamborn, S. D., Dornbusch, S. M., & Darling, N. (1992). Impact of parenting practices on adolescent achievement: Authoritative parenting, school involvement, and encouragement to succeed. *Child Development*, 63, 1266-81.

若林明雄・内山登起夫・東條吉邦・吉田友子・黒田美保・サイモンバロン-コーエン・サリーウィールライト (2007). 自閉症スペクトラム指数(AQ)児童用日本語版の標準化-高機能自閉症・アスペルガー障害児と定型発達児による検討. 心理学研究, **77**, 534-540.